



👁️👁️ みどころ

今年還暦を迎えたジャッキー・チェンが、前作を最後に封印したはずのアクションに再び挑戦！父娘の絆を取り戻すためなら、それもやむなし？それとも・・・？

クラブは犯罪の温床？本作を観ればそう思わざるを得ないが、ジャッキーとその娘そして人質たちによる5年前の事件の真相解明の「裁判」は一体何のために？

脚本的にイマイチの面もあるが、父親だって娘の命を守るためなら自分の頭に拳銃を当てる自己犠牲も。しかして、その説得力は・・・？

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■還暦を迎えたジャッキー・チェンのアクションは？■□■

1954年生まれ、今年4月7日の誕生日で還暦に。監督、製作、脚本、主演の4役をこなした前作、『ライジング・ドラゴン』（12年）が「最後のアクション大作」になるはずだった（『シネマルーム30』243頁参照）が、ディン・シェン監督に「本作は基本的にアクション映画でない」と騙されたらしく（？）、本作もかなりハードなアクション映画になっている。もっとも、ハリウッドでは、シルベスター・スタローンとアーノルド・シュワルツェネッガーが『大脱出』（13年）で対決したり（『シネマルーム32』掲載予定）、ロバート・デ・ニーロとシルベスター・スタローンが『リベンジ・マッチ』（13年）で対決したりしているから、アジアを代表するアクション俳優たるジャッキー・チェンだってまだまだ！もっとも、いつものジャッキー一流の飛んだり跳ねたりアクションはまだ健在でも、ホンモノの中国の格闘技「散打」のチャンピオンだ

ったというファイター（リュウ・ハイロン）との対決は、映画のうえではギリギリ勝利できたが、ホントにやればボロボロにされることまちがいないし・・・？

■□■この人質たちはなぜ？犯人の要求は？■□■



BD&DVD 発売（2014年12/2発売）発売元：ブロードメディア・スタジオ／ハピネット 販売元：ハピネット
© 2013 Jackie & JJ Productions Limited, Wanda Media Company Limited and Starlit HK International Media Company Limited All rights reserved

いくら一人娘が可愛くても、刑事生活が忙しいとなかなか家庭をかまうヒマがない。そんな本作の主人公ジョン・ウェン（ジャッキー・チェン）は、一人娘の母親（つまりジョンの妻）の死に際にも間に合わなかったらしい。その結果、今や立派に成人した娘のミャオ（ジン・ティエン）は、そんな父親に復讐するかのように「大事な話がある」と言って久しぶりに呼び出したジョンに対して、父親ほどの年齢のナイトクラブ“ウー・バー”の経営者ウー・ジアン（リウ・イエ）を「私の恋人」と紹介したから、ジョンはビックリ。

ところが、実はミャオもウーに騙されていたようで、ウーがミャオをエサにしてジョンを呼び出したのはかなり複雑な理由があるらしい。結局、ウーはジョンを捕えてしまったうえ、ミャオや薬局の店長、不動産会社社長、クラブのママ等を「人質」にしたうえで、警察に対してウェイ・シャオフー（ジョウ・シャオオウ）という囚人を今や要塞と化したウー・バーに連れてくるよう要求。先日、大阪では「クラブは犯罪の温床か否か」をめぐる裁判において、無罪の判決が下されたが、本作を観ていると、やはりクラブは犯罪の温床……。これらの人質の人選には一見何の意味もないと思われたが、よくよく考えてみると、ジョンを含めて、これらの人質やウェイは、5年前に起きた薬局でのシャオウェイ（グーリー・ナーザー）死亡事件の関係者だった。これがすべてウーの仕組んだものだとすると、ウーは一体何者？

■□■5年前の「事件」の真相をめぐる「裁判」は？■□■

ウーを演ずるリウ・イエが、『山の郵便配達』（99年）（『シネマルーム5』216頁参照）で主演し、『小さな中国のお針子』（02年）（『シネマルーム5』294頁参照）等に出演した、あの純朴な若手俳優だと知って私はビックリ。しかし、同時にそんな俳優が演じているだけにウーは一見ワルだが、実は・・・？

本作中盤には、薬局での「あの事件」でナイフで首を斬られて（斬って？）死亡した女性シャオウェイがウーの妹だったこと、そして、今ウーが進行させているとんでもない事態は「あの事件」の真相を解明し、真犯人へ鉄槌を下すための大芝居であることが判明する。現実には、ジョンがウーとの約束どおり囚人ウェイをウー・バー内に連行し、首に時限爆弾を装着された人質たちと共に、ウーを裁判長とする「公開裁判」が始まると、証人たちはそれぞれ自分の考える真実を次々と暴露（証言？）。ジョンも、たまたま薬局の近くをパトロールしていたため、事件に巻き込まれることになり、シャオウェイの首にナイフを突きつけていたウェイを説得する役割になったが、残念ながらそれは成功しなかった。すると、シャオウェイの死亡につきジョンにもやはり一端の責任が・・・？本作後半は、それぞれいわくつきの事情を抱えた者たちによる異例の「公開裁判」(?)が展開されるので、それに注目！

■□■父娘の絆が、テーマだが・・・■□■

本作冒頭、苦悩の表情で自らの頭に拳銃を突きつけ、今にも引き金を引こうとするジャッキー・チェンの姿が登場するが、それは一体なぜ？自分のハラを痛めた母親は子供のためなら喜んで死ぬことができるそうだが、さて父親は？仕事が忙しいため、妻の死に目にも立ち会えなかったジョンのような男なら、娘がどこでどう困っていても知らん顔。まして、娘の代わりに死ぬと言われたって、そんなことは、とてとても・・・。そう考えるのが普通だが、意外や意外、ジョンの場合は・・・？

父娘の絆を描いた名作は多いが、本作のテーマもそれ。一人だけ拳銃を握ったウーが裁判長を務めるのはどう考えても公正ではないが、そんな「公開裁判」のタイムリミットが切れるとともに強行突入してきたSWATたちとの死闘の中で、ジョンとミャオが見せる父娘の絆とは？

本作を鑑賞した5月15日現在、南シナ海の南沙諸島にあるジョンソン南礁をめぐる中国vsベトナムの争いはエスカレートし、ベトナムではデモ隊が中国系の工場を焼き打ちにする事態まで発生している。しかし、ジャッキー・チェンが香港ではなく中国本土で撮影した本作における一見悪役のウーは、ストーリー終盤になるにつれて、決して悪人ではないことが明らかになってくる。本作ではそれがせめてもの救いだが、今や「反中の渦」になっている南シナ海の今後の展開は・・・？

2014（平成26）年5月19日記